

六章一—十四節は決して解し易い箇處ではない、さりとて全然不可解の所ではない、大體の精神を掴むことは少しく注意すれば出來、既に大體の精神が分れば各句、各語の意味も亦おのづからほゞ理解せられるのである、そして其爲には我等は先づ前後の關係を見てパウロの思想排列の順序を探らねばならぬ。

抑も六章と七章は何を記すを主眼とするのであるか、曾て説きし如く羅馬書の三大問題の第一たる「個人の救」は（第一）義とせらるゝ事、（第二）潔めらるゝ事、（第三）救はるゝ事の三項に分ちて述べられて居る、この中第一の義とせらるゝ事は一章後半より五章に至るまでの主題であつて、我等は今までにそれを見來たのである、其主眼は人の義とせらるゝは決して行の義によらず、神より云へば恩、恵、人より云へば信仰に因ると云ふにある、そして「イエスキリストの贖あがなによりて神の恵めぐみを受け功いほしなくて義とせらるゝなり」（三の二四）とある如く、此大なる特權は偏にキリストの十字架に依ると云ふのである、これ慥かに福音である。

併しながら茲に一の疑問が當然起る、もし行によりて義たる能はず信仰によりて義とせらると云ふならば行は如何でも宜いこととなる、換言すれば信仰が義とせらる事の唯一の條件であれば行は如何にあつても問題とならぬ、何を爲しなくとも宜いと共に亦何をしても宜いことになる、然る時は信仰至上主義の教義は實際道德の上に大なる危険をもたらすではないかとの疑問である、パウロは此疑問を假想して六章一節に於て「然らばわれら何を言はんや、恵みの増さんために罪に居るべきか」と云ふのである、罪のある處に恵が加はるならば恵を益々受け

んためには罪の中に居るを宜しとすべきではないかとの疑問である、パウロは第二節に於て此疑問を一蹴し去つて云ふ「然からず我等罪に於て死にし者なるにいかで尚ほ其中に於て生きんや」と、我等すでに悔改めて赦罪の恵に浴せし者、罪に於て死にし過去の慘狀は想起するだに恐ろしきものである、然るに今に至て恵の増さんためとて再び罪の中に死の生活を續けんとする如き到底思ひ得ぬことであるとパウロは云ふ、斷乎として疑問を斥ける彼の態度は例に依て強烈である。

この一語は愚なる疑問を一蹴し去るには充分である、しかしパウロは之を機として信仰生活の特徴たる「潔め」の問題に入るのである、これ第三節以下である、もし彼が此問題に入る必要がなかつたならば、第二節に於て疑問を一蹴し去つて直ちに第八章の「救ひ」の問題に入るべきであつた、しかし彼は「潔め」のことを説明するを必要とした、故に六章七章に於て之を説いたのである、何故に彼は之を説かねばならなかつた、それは「潔めらるゝ事」が信仰生活上に不可缺の事であるからである、「義とせらるゝ事」とは人の罪が赦され、神と人の間の隔てが失せ、義として神に受けらるゝに至つたことである、恰も家を離れて徨ひ居りし子が父の家に戻るに至つたと云ふだけの事である、神の子とせられたのである、けれども未だ名實備はる神の子となつたのではない、之からは名實共に備はる神の子とならねばならぬ、これ即ち「潔めらるゝ事」である、これ眞の神の子になるために是非ともなくてはならぬ事である。

之を譬へて云へば「義とせらるゝ事」と云ふのは、恰も王家を離れて永く漂浪の旅にありし王子が再び王家に戻り來つたと云ふだけの事である、彼は名だけ王子となつたのであつて未だ王子たるの實を備てゐない、永き放

浪は彼をして遮民の如くならしめた、彼が王子たる品性と威嚴を回復せんには其上尚ほ幾歳月を要するのである、基督者は義とせられ神の子とせられた後更に神の子たる實に向つて進みゆかねばならぬ、これ即ち「潔め」である、更にも一つの比喩を以てせば重病を醫やされたものが直ちに健康者となることは出来ぬ、病の去りしは事實であるが未だ衰弱は残つてゐる、或月日を経て後この衰へが失せて健康回復し、初めて健全者となるのである、この健康回復の経過が即ち「潔め」に相當するのである、義とせられし者は義と見做されただけで、未だ義となつたのではない、これから眞に義となるべきである、されば信者は神の子の完全を志して進むべきである、小キリストとならんとする努力、之が信仰生活の常の姿でなくてはならぬ、此事を知らずして唯悔改めし事、たゞ義とせられし事、只洗禮を受けし事、これだけを以て満足する者が多い、基督信者の無力、基督教會の腐敗は概ね茲に基づくのである、之を至難の事、不可能の事と見る人があるかも知れぬ、併し至難であるか不可能であるかは別問題として、これ基督者に缺くべからざる事であり、且又信仰の與ふる歡喜も希望も之なくては充分なるを得ないのである、然り、得られないのである。

この潔めの事を説明するためにパウロは三つの例を引いたのである、第一はバプテスマのこと（一節以より）、第二は奴隸のこと（十五節より）、第三は婚姻のこと（七章一節より）である、バプテスマは初代教會に於ては全身を水に浸す式であつた（今日浸禮教會にて爲す如く）、之れには意味がある、即ち全身を水に埋めるのはキリストと共に死して葬られし事を象徴し、そして水より引き出さるゝのは彼と共に復活したことを象徴したのである、故にバプテスマを受くるに當つて必要なものが二つ在つた、第一はキリストの死（勿論贖罪の死）と復活とを信

ずることであり、第二は自身又キリストと共に罪に死にて義に甦へりし事を實驗する事であつた、この第二の實驗を形に現はしたのがバプテスマであるが故に、自然バプテスマは亦第一の信仰をも表白するものとなるのである、何となれば第一の信仰なくしては第二の實驗は起り得ないからである、バプテスマとは斯くも意味深きものであつた、キリストの復活といふ客觀的事實を認むると共に、彼と共に死し共に復活せしめてふ主觀的經驗を象徵したものであつた、かくも意味深きバプテスマが今日輕き事として行はれ居るは痛歎の至りである。

右の事を知りし上にて三節以下を読むときは意味は大體に於て明瞭となると思ふ、先づ三節―五節は左の如くである。

- (3) イエスキリストに合はんとてバプテスマを受けし者は即ち其死に合はんとて之を受けしなるを汝等知らざるか、(4) 故に我ら其死に合ふバプテスマに由りて彼と共に葬らるゝはキリスト父の榮に由り甦へされし如く我等も新しき生命に歩むべきためなり、(5) もし我等彼の死の様に等しからば亦かれの復生よみがへりにも等しかるべし。

我等は既にバプテスマを受けた、想起せよ我等が此式に與かつたのはキリストと共に死しキリストと共に甦へりし實驗を象徵したものである事を、我等が信仰生活に入つたと云ふ事はキリストと共に新しき生命に甦つたことである、生れ變つて「新しき生命に歩む」ことは是れ即ち信仰の生涯である、然るにいかでして舊き罪の生涯を續けることが出來ようか、如何にして「罪の中に生きる」ことが出來ようか、パウロは云ふのである、更に六節には曰ふ。

(6) 我等の舊き人かれ（キリスト）と共に十字架に釘けらるゝは罪の身滅りて今より罪に役へざるが爲なるを我等は知る。

と、我等の舊き人は既に主と共に十字架にて死した、これ罪の身亡びて以後は罪に役へる事なきためである、基督者は既に罪といふ舊主人の許を辭して之に事へぬ者であると云ふのである、更に九節—十一節を見よ。

(9) 基督死より甦りて復た死なず、死も亦彼に主とならざるを知れり、(10) これ其死にしは罪について一度死にしなり、その生くるは神について生くるなり、(11) かく汝等も我等の主イエスキリストにより罪については自ら死ぬる者、また神については生ける者なりと思ふべし。

キリストと基督者の靈的合致は茲に記されてゐる、既にバプテスマを受てキリストと共に死し共に甦へりしといふ實驗あらば、彼が罪について死せし如く我等も罪について死せる者、彼が神について今生ける如く我等も神について生ける者であるべき筈である、我等は既に罪とサタンに事へる生涯を棄てゝ義と神とに事へる生涯に入つたものである、然り慥かにさうである、併し乍ら此一義を人は往々にして忘れんとする、この潔めらるゝ事を忘れて唯義とせられし恩恵の甘夢を貪るべく午睡を續けんとする、故にパウロは十二、十三節に於て勧めの語を述べるのである、

(12) この故に汝等罪を死ぬべき肉體に王たらしめて其の慾に従ふ勿れ、(13) また汝等の肢體を不義の器となして罪に献ぐることを勿れ。死より甦へりし者の如く己を神に献げ、また肢體を義の器となして神に事ふべし。罪をして肉體を支配せしむる勿れ、肢體を罪てふ主人に献げて不義の器となす勿れ、キリストと共に死より甦へ

りて新生涯に入りしものなる以上、己を全く神にさ献げ肢體は之を義の器となし、専ら神の僕として義に奉仕する生活を営むべしと、これパウロが全力をこめて茲に勧むる所である。

信仰とはキリストと合致する事である、故に彼と共に甦へる事である、罪に死し義に甦へる事である、凡てを

以て神に従ひ義に事ふる生涯、これが潔めらるゝ生涯、これが潔めらるゝ事である、パウロは哥林多後書三章十八節に於て云ふた、「凡て我等帕子かほびなくして鏡に照すが如く主の榮を見、榮に榮いやまさりて其同じ像に化るなり、これ主即ち靈みたまに由りてなり」と、キリストを仰ぎ、眺め、信ずる生涯は次第に聖化せられてキリストと同じ像のものとなる、そして之は自力によるに非ず全く聖靈によるのであるとパウロは茲に云ふのである、かく聖靈によつて化せられて次第にキリストに似たるものと成り進むが「潔めらるゝこと」である、健全なる信仰生活は常にこの種の生活である、赫々たる光明の希望に生くる生活にあるべき我等いかで舊き罪の中に生くるを得ようか、いかで舊きエチプトに歸りゆくを得ようか、ただ義とせられし事のみにて晏如あやふたり得ようか、否々我等は益々潔めを聖靈に依て實現せらるべく祈り且求めなくてはならないのである。

附 言

バプテスマの意味は前述せし通りである、たゞ問題となるのは斯る新生に入つたものにバプテスマの式の必要あるかなきかと云ふことである、或人は有りと云ひ或人は無しと答へる、何れにしても之は根本問題、主要問題、第一義的問題ではない、そして我等の主張は必しも形の上の儀式を受くる要なし（或は受けた方がより、良いかも知れぬが）と云ふのである、「無くて叶ふまじきものは一」である、他は有るも可し無くも可しである。

六章一—十四節は決して理解しにくい個所ではない。かといってまったく解き明かせない場所でもない。大体の精神を捉えることは少し注意すればでき、すでに大体の精神が分かれば、それぞれの句や言葉の意味もまた自然とほぼ理解できるのである。そしてそのためには、私たちはまず前後の關係を見て、パウロの考えの並び順を探らなければならない。

そもそも六章と七章は何を記すことを主眼とするのか。かつて説明したように、ローマ書の三大問題の第一である「個人の救い」は、（一）義とされること、（二）きよめられること、（三）救われること、の三つの項目に分けて述べられている。このうち第一の「義とされること」は、一章後半から五章に至るまでの主題であって、私たちは今までにそれを見てきた。その主眼は、人が義とされるのは決して行いによる正しさではなく、神から言えは恵み、人から言えば信仰によるという点にある。そして「神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いを通して、価なしに義と認められるからです」（三章二十四節）とあるように、この大きな特権はひとえにキリストの十字架によると言うのである。これは確かに福音である。

しかし、ここに一つの疑問が当然起こる。もし行いによって義となることができず、信仰によって義とされるというならば、行いはどうでもよいことになってしまう。言い換えれば、信仰が義とされるための唯一の条件であれば、行いはどうであつても問題とならない。何をなさなくてもよいと同時に、また何をしてもしもよいことにな

ってしまう。それでは、信仰を第一とする教えは、実際の道徳の上に大きな危険をもたらすのではないかという疑問である。パウロはこの疑問を想定して、第六章一節において「それでは、どのように言うべきでしょうか。恵みが増し加わるために、私たちは罪にとどまるべきでしょうか」と言うのである。罪のある場所に恵みが増すなら、恵みをますます受けるためには罪の中に留まることがよいのではないかという疑問である。パウロは第二節においてこの疑問を一蹴して言う。「決してそんなことはありません。罪に対して死んだ私たちが、どうしても罪のうちに生きていられるでしょうか」と。私たちはすでに悔い改めて罪の赦しの恵みを受けた者であり、罪の中で死んでいた過去の悲惨な状況は思い出すだけでも恐ろしいものである。それなのに今になって、恵みを増すためだからといって、再び罪の中で死んだ生活を続けようとするなど、到底考えられないことであるとパウロは言う。断固として疑問を退ける彼の姿勢は、例によって強烈である。

この一言は愚かな疑問を一蹴するには十分である。しかしパウロはこれを機会として、信仰生活の特徴である「きよめ」の問題に入るのである。これが第三節以下である。もし彼がこの問題に入る必要がなかったならば、第二節で疑問を一蹴して直ちに第八章の「救い」の問題に入るべきであった。しかし彼は「きよめ」のことを説明する必要があった。だから第六章と七章においてこれを説いたのである。なぜ彼はこれを説かなければならなかったのか。それは「きよめられること」が信仰生活の上で欠かすことのできない事柄だからである。「義とされること」とは、人の罪が赦され、神と人との間の隔たりがなくなり、正しい者として神に受け入れられるに至ったことである。あたかも家を離れてさまよっていた子供が父の家に戻ってきたというだけの話である。神の子とさ

れたのである。けれども、まだ名実ともにそろった神の子となったわけではない。これから名実ともにそなわる神の子とならなければならない。これこそが「きよめられること」である。これは真の神の子になるために、ぜひとも必要なことである。

これを例えて言えば、「義とされること」というのは、あたかも王家を離れて長く放浪の旅にあった王子が、再び王家に戻ってきたというだけの話である。彼は名前だけ王子となったのであって、まだ王子としての実質を備えていない。長い放浪は彼を一般の人々のようにしてしまった。彼が王子としての品性と威厳を取り戻すには、さらに長い年月を必要とするのである。キリスト者は義とされ神の子とされた後、さらに神の子としての実質に向かつて進んでいかなければならない。これこそが「きよめ」である。さらにもう一つのたとえを使えば、重病をいやされた者がすぐに健康な人になれるわけではない。病気が去ったのは事実であるが、まだ体力のおとろえは残っている。ある月日を経てからこのおとろえが消えて健康を取り戻し、初めて健全な人になるのである。この健康回復の経過こそが「きよめ」に相当するのである。義とされた者は、義と見なされただけであって、まだ義となったのではない。これからは本当に義となるべきである。そうであれば、信者は神の子としての完全を目指して進むべきである。小さなキリストになろうとする努力、これが信仰生活のいつもの姿でなければならない。この事を知らずに、ただ悔い改めたこと、ただ義とされたこと、ただバプテスマを受けたこと、これだけをもって満足する人が多い。キリスト信者の力のなさ、キリスト教会の腐敗は、おおむねここから来ているのである。これを極めて難しいこと、不可能なことと見る人がいるかもしれない。しかし、極めて難しいか不可能であるか

は別問題として、これはキリスト者に欠かせないことであり、かつまた信仰の与える歓喜も希望も、これがなければ十分なものとはなり得ないのである。そう、得られないのである。

この「きよめ」のことを説明するために、パウロは三つの例を挙げた。第一はバプテスマのこと（一節より）、第二は奴隷のこと（十五節より）、第三は結婚のこと（七章一節より）である。バプテスマは初代教会においては全身を水に浸す式であった（今日の浸礼教会で行われているように）。これには意味がある。つまり全身を水に沈めるのは、キリストとともに死んで葬られたことを象徴し、そして水から引き上げられるのは、彼とともに復活したことを象徴したのである。したがって、バプテスマを受けるに当たって必要なものが二つあった。第一はキリストの死（もちろん罪を償うための死）と復活とを信じることであり、第二は自分自身もまたキリストとともに罪に死んで義に蘇ったことを体験することであった。この第二の体験を形に表したものがバプテスマであったため、自然とバプテスマは第一の信仰をも告白するものとなるのである。なぜなら、第一の信仰がなければ第二の体験は起こり得ないからである。バプテスマとは、これほどまでに意味深いものであった。キリストの復活という客観的な事実を認めると同時に、彼とともに死に、ともに復活したという主観的な経験を象徴したものであった。これほど意味深いバプテスマが、今日では軽いものとして行われているのは、痛痛しい限りである。

右のことを知った上で三節以下を読むならば、意味は大体において明確になると思う。まず三節から五節は次のとおりである。

- (3) それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、

その死にあずかるバプテスマを受けたものではありませんか。(4) 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、ちょうどキリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、新しいいのちに歩むためです。(5) 私たちがキリストの死と同じようになって、キリストと一つになっているなら、キリストの復活と同じようになるからです。

私たちはすでにバプテスマを受けた。思い出してほしい。私たちがこの洗礼式に加わったのは、キリストとともに死に、キリストとともに蘇った体験を象徴したものだということを。私たちが信仰生活に入ったということは、キリストとともに新しい生命に蘇ったことである。生まれ変わって「新しいいのちに歩む」こと、これこそが信仰の生涯である。それなのに、どうして古い罪の生涯を続けることができようか。どうして「罪の中に生きる」ことができようか。パウロはそう言うのである。さらに六節にはこう言う。

(6) 私たちは知っています。私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが減ぼされて、私たちがもはや罪の奴隷でなくなるためです。

と。私たちの古い人はすでに主とともに十字架で死んだ。これは罪の体がなくなって、それからは罪に仕えることがないようにするためである。キリスト者はすでに罪という古い主人の元を離れて、これに仕えない者となったと言うのである。さらに九節から十一節を見よ。

(9) 私たちは知っています。キリストは死者の中からよみがえって、もはや死ぬことはありません。死はもはやキリストを支配しないのです。(10) なぜなら、キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたの

であり、キリストが生きておられるのは、神に対して生きておられるからです。(11) 同じように、あなたがたもキリスト・イエスにあつて、自分は罪に対して死んだ者であり、神に対して生きている者だと、認めなさい。

キリストとキリスト者との霊的な一体化は、ここに記されている。すでにバプテスマを受けてキリストとともに死に、ともに蘇ったという体験があるならば、彼が罪に対して死んだように、私たちも罪に対して死んだ者であり、彼が神に対して今生きているように、私たちも神に対して生きている者であるはずである。私たちはすでに罪とサタンに仕える生涯を捨てて、義と神とに仕える生涯に入つた者である。そう、確かにそうである。しかしながら、この一つの真理を人は往々にして忘れようとする。この「きよめられること」を忘れて、ただ義とされた恵みの心地よい夢を貪るように、居眠りを続けようとする。だからパウロは十二、十三節において、勧めの言葉を述べるのである。

(12) ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪に支配させて、からだの欲望に従つてはいけません。(13) また、あなたがたの手足を不義の道具として罪に献げてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者としてあなたがた自身を神に献げ、また、あなたがたの手足を義の道具として神に献げなさい。

罪に肉体を支配させてはならない。体を罪という主人に献げて不義の道具としてはならない。キリストとともに死から蘇つて新しい生涯に入つた者である以上、自分を完全に神に捧げ、体はこれを義の道具とし、ひたすら神の僕として義に仕える生活を送るべきだ、と。これこそパウロが持てる力を込めて、ここで勧めていることであ

る。

信仰とはキリストと一体になることである。だから彼とともに蘇ることである。罪に死んで義に蘇ることである。すべてをもつて神に従い、義に仕える生涯、これが「きよめられる生涯」、これが「きよめられること」である。パウロはコリント人への手紙第二 三章十八節において言った。「私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつづつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです」と。キリストを仰ぎ、見つめ、信じる生涯は、次第に聖なるものとされてキリストと同じ姿のものとなる。そしてこれは自分の力によるのではなく、まったく聖霊によるのであるとパウロはここで言うのである。このように聖霊によって変えられて、次第にキリストに似た者へと成長していくことが「きよめられること」である。健全な信仰生活は常にこのような生活である。輝かしい光に満ちた希望に生きる生活にあるべき私たちは、どうして古い罪の中に生きることができようか。どうして古いエジプトへ帰り行くことができようか。ただ義とされたことだけで安心していられようか。いや、私たちはますます「きよめ」が聖霊によって実現されるように祈り、かつ求めていかなければならないのである。

追 記

バプテスマの意味は前述のとおりである。ただ問題となるのは、このような新しい命に入った者に、バプテスマの儀式が必要であるかないかということである。ある人は必要と言い、ある人は不要と答える。いずれにしても、これは根本的な問題、主要な問題、最も大切な問題ではない。そして私たちの主張は、必ずしも形の上の儀

式を受ける必要はない（あるいは受けた方がよりよいかもしれないが）ということである。「なくてはならないものは一だけ」である。他はあってもよく、なくてもよいのである。